

平成20年度 附属中学校「教育相談室」活動報告

青木 真理^{*a}、金成 美恵^{*b}、安藤久美子^{*c}
安田 雄生^{*c}、天形 健^{*d}、島 義一^{*c}

附属中学校を中心とする「教育相談室」活動に関して、平成20年度の活用内容、相談件数と内容などについて報告し、今後の課題を検討する。

〔キーワード〕 教育相談室 スクールカウンセラー 大学附属学校 教育相談組織
ピアサポート

I はじめに

福島大学附属四校園では平成17年より、共同事業として「教育相談室」が設置され、附属中学校を主幹校として運営されてきた¹⁾²⁾³⁾⁴⁾。本報告は、平成20年度の「教育相談室」活動について、附属中学校を中心としたスクールカウンセラー（以下、SC）の活動、附属中学校の教育相談推進委員会、「ピアサポートプログラム」、附属四校園教育相談推進委員会の4点から報告する。

執筆の分担は、IIを金成が青木と協議しながら主として執筆、IIIを安田、IVを安藤、Vを金成、VIを島が主として執筆し、そのうえで執筆者全員が議論を行い、青木の責任で全体をまとめた

II スクールカウンセラーの活動

1. 活動形態

平成20年度のスクールカウンセラー（以下SC）の勤務日数は合計で77日（20年4月～21年3月）であった。青木が20年8月から21年1月まで内地研究で不在だったため前年度に比べ13日間減少した。その他19日は附属小への勤務であった。2名のカウンセラーのうち青木が週1回4時間（原則的に月曜13時から17時）、金成が週2回4時間の計8時間（原則的に火・木曜9時30分から13時30分）勤務した。金成は月2回附属小にも勤務し（原則的に月曜か火曜の11時から15時）、残り6回は附属中に勤務した。

附属中学校での活動場は19年に「スマイル・ルーム」と愛称のついた相談室が中心であるが、場合によっては保健室や隣接する保健相談室で生徒の話聞くこともあった。

附属小学校では主に少人数支援室に滞在し、担当者と情報交換を行い、必要に応じて児童の行動観察などを実施した。児童面接や保護者面接の際には少人数支援室や学年準備室を使用した。

附属中学校に隣接する附属幼稚園では教員の要請に応じ一日相談会を実施し、保護者面接を行った。

2. 活動回数、相談件数、相談内容

平成20年度のSC活動回数、相談件数、相談内容は表1、表2、表3の通りである。

19年度に比べると箱庭・エゴグラムの体験者が約3倍に増えた。箱庭・エゴグラム体験を除いた相談件数は19年度14件のところ20年度17件と微増している。20年度は半年間SCひとり体制でありSC勤務日数は19年度より少ないことを考えると、生徒の相談室を気軽に利用する傾向が高まったことが示されていると思われる。

箱庭・エゴグラム体験者は主に夏休み前に来室し、特に新入生である1年生女子の利用率が41%（37名）と高かった。これについては金成が18年度より附属小に月2回勤務しており、小学校卒業前に附属中相談室の告知を意識的に行ったことが影響していると考えられる。また箱庭・エゴグラム体験者から相談室の様子が口コミで広まり、来室者がフィードバックを目的に来室する際、別の生徒を連れてくるということもあった。箱庭・エゴグラム体験後に相談に結びついたケースが1年生で2件、全体では4件あった。体験を目的とした来室者の中にはSCとの面接のニーズを持ち、相談室やSCの様子を観察することを潜在的な目的としているものがあることを示しているのではないかと。また当初そうした意図がなくても箱庭・エゴグラム体験で相談室の来室経験をすることは、カウンセリングに臨む心理的ハードルを低くしSCとの心理的距離を縮める作用があると思われる。

相談内容は不登校、集団不適応、友人関係の悩みなど前年度とほぼ同数であるが、不安感・抑うつ感を訴えるケースが増加したことが20年度の特徴といえる。また生徒の面接人数が19年度は21名だったところ17名と減少したにも関わらず、面接回数が19年度の78回から146回に増えたことは一人あたりの面接回数が増え

* a : 福島大学総合教育研究センター教育相談部門
* c : 福島大学附属中学校

* b : 福島大学附属中学校スクールカウンセラー
* d : 福島大学人間発達文化学類、福島大学附属中学校長

たことを示しており、面接頻度を上げて支援したケースが多かった。教師支援が35回から44回に増加したこともこの傾向に連動しているものと考えられる。20年度は保護者面接の回数が減少したが、定期的・継続的に生徒面接を行うケースは保護者面接を併行実施することがあった。中には親子同席の面接もある。なお、原則的に各SCの担当ケースは固定したが、青木の不在期間に金成が代替したケースもあった。

教員との連携が必要と思われる場合にはなるべく短時間でも直接情報交換できるよう努めたが、教員・SCともに多忙で時間が取れない場合は養護教諭が仲立ちし伝達を行うことがあった。また緊急の打ち合わせが必要と思われた場合には勤務時間外に関係者が対応を協議する時間が設けられたこともある。

なお、養護教諭とカウンセラーはほぼ毎回情報交換とコンサルテーションを兼ねた話し合いをもっており、この表の面接回数には含めていない。

表1 平成20年度のSC相談件数

| | |
|-----------|-----|
| 関わった相談ケース | 54件 |
| 校種・学年別件数 | |
| 附属中 | 49件 |
| 1年 | 31件 |
| 2年 | 12件 |
| 3年 | 6件 |
| 附属小 | 1件 |
| 附属幼稚園 | 4件 |

表2 平成20年度のSC相談の内容

| | |
|-------------|-----|
| 不登校（別室登校含む） | 5件 |
| 集団不適應 | 6件 |
| 友人関係 | 7件 |
| 不安感・抑うつ感 | 7件 |
| 箱庭・エゴグラム体験 | 32件 |
| 育児 | 3件 |
| 発達 | 1件 |
| その他 | 1件 |

* なお、1つのケースが二つ以上のカテゴリーにまたがることもある。

表3 平成20年度のSC相談の面接回数

| 面接の対象 | 人数 | 面接回数 |
|----------------|----|------|
| 生徒・児童 | 17 | 146 |
| 保護者 | 13 | 41 |
| 教員 | | 44 |
| 生徒(箱庭・エゴグラム体験) | 32 | 62 |
| 計 | 62 | 293 |

3. 箱庭・エゴグラム体験

箱庭・エゴグラム体験は特定の生徒だけではなく、より多くの生徒が気軽に相談室を利用できるよう18年度に「スクールカウンセラーだより」(後述)を通して呼びかけが始まった。

20年度は箱庭の体験者が11名、エゴグラム体験者は

31名だった。(一人の人が両方を体験する場合もある。)悩みを抱えていても相談室に来室できない生徒や、顔も知らないカウンセラーに相談しにくい生徒を想定し「自分のことを知ってみよう!」と悩みがなくても来室できる相談室の環境整備を試みた。相談目的で相談室に来室する中には箱庭・エゴグラム体験を口実にする生徒もおり、相談室利用の目的が幅広く設定されることで利用しやすくなることも考えられる。尚、箱庭の器具は平成17年度終わりに導入されており、エゴグラムは、18年度に導入された。

エゴグラムはより多くの生徒が体験できるよう、生徒が再実施したい場合は半年から1年間ほど期間を置くことを勧めている。箱庭は来室の度に制作することが可能だが、相談室の箱庭は1つしかないため、製作者は限定され早い者勝ちになってしまうこともある。今後は何度でも利用できる相談室を想定し、カラージュや描画法の採用も検討したい。

4. スクールカウンセラーだより

20年度は通常のスクールカウンセラーだよりの他に4月と12月に特別号を発行し計9号の発行となった。4月の特別号ではスマイル・ルームの利用方法をQ&A形式で説明し、SC面接がより身近なものと感じられるよう工夫した。特に1年生にはSCとのつながり

スクールカウンセラーだより No.7
2008.12.5 福島大学附属中学校スマイル・ルーム

ピア・サポート・プログラム活動が始まります!

附属中では、ここ数年ピア・サポート・プログラム活動を毎年実施してきました。この活動では仲間(=ピア)がお互いを支える(=サポート)ことができるように、「聞く」「話す」といったコミュニケーションの力を高める練習をします。これまでは保健委員を中心に活動していましたが、今年は枠をはずし、附中生なら誰でも参加できるようにしました。12月11日(木)から1月まで5回のコースとします。詳しくは「スクールカウンセラーだよりピア・サポート・プログラム活動特別号」でお知らせします。 カウンセラー 金成

12・1月の予定

| 月日 | 曜日 | 担当 | 勤務時間 |
|--------|----|----|------------|
| 12月9日 | 火 | 金成 | 9:30-13:30 |
| 12月11日 | 木 | 金成 | 9:30-13:30 |
| 12月18日 | 木 | 金成 | 9:00-13:00 |
| 1月13日 | 火 | 金成 | 9:30-13:30 |
| 1月15日 | 木 | 金成 | 9:00-13:00 |
| 1月22日 | 木 | 金成 | 9:30-13:30 |
| 1月27日 | 火 | 金成 | 9:30-13:30 |
| 1月30日 | 金 | 金成 | 9:30-13:30 |

附小勤務予定 12月15日(月) 1月19日(月)
青木先生は内地研究のため1月までお休みです。

カウンセリングの申込み方法

- 1 担任・養護教諭を通して申し込む。
- 2 スマイル・ルーム直通電話で上記時間内に申し込む。☎024-534-6451(直通)
※附属小学校勤務日は不在となります。
- 3 直接スマイル・ルームに来室する。(予約の方便先になります。)

図1 12月の「スクールカウンセラーだより」

を作るきっかけとなり、「SCだよりを見て」と来室した者が増加した。SCだよりは生徒向けの校内紙であるが、保護者の手元にも届くことが前提で、生徒と同様保護者にも相談室を知る手段の一つとなっている。

12月の特別号はピアサポートプログラムへの参加を呼びかける内容で、活動の目的や活動計画について告知した(図1)。

これ以外にもSCだよりの配布時に担任が生徒にSC面接を促し、それを機会に一時中断していた面接が再開されることもあった。

なお、スクールカウンセラーの勤務日は、養護教諭が発行する「保健室だより」、各学年発行の「学年だより」にも掲載された。

Ⅲ 教育相談推進委員会

1. 組織

本年度は当委員会が発足して4年目にあたる。委員会は前年度と同様、委員長(安田)、教諭2名、校長、副校長、主幹教諭、養護教諭、SCによって構成されている。なお、委員長、教諭2名および養護教諭は、生徒指導委員会内に設けられた教育相談系の4名である。また、委員長、教諭2名は所属学年が重ならないようにしている。

2. 会合とその内容

会合は、原則として毎月1回、SCの出動日にあわせて開催した。内容は、カウンセリングを必要としている、またはカウンセリングを行っている生徒・保護者への対応と相談の仕方についての協議や相談結果の報告等を中心としている。

会は概ねSCによる相談に関する報告、各学年からの報告と対応に関する協議、SCからの助言の順で行われた。

会での話し合いの内容は、各学年教諭が各学年スタッフや各担任に伝え、共通理解を図った。

3. 成果と課題

本年度の最大の成果は、当委員会を8回開催したこと(前年度は4回)により、情報交換が密になり、普段からSCとすみやかに連携がとれるようになったことである。また、SCから具体的な情報や対応に関する助言をいただく機会が増え、生徒や保護者への対応をより適切に行えたことも成果としてあげられる。

一方、会合での協議や報告の内容が生徒指導委員会の会合内容と重なってしまうことが多く、学校全体の会議の効率化という点から見た場合には改善の必要がある。

また、前年度の課題として、当該生徒の担任の会合への出席が日程の都合で実現しなかったことが挙げら

れていたが、本年度も担任の出席は実現しなかった。しかし、SCと担任との連携は日頃からカウンセリングの記録簿の回覧によって図られており、必要に応じて直接に情報交換をしているので、担任の出席にこだわる必要はないとの意見も出された。

教育相談にかかわる有用な情報の発信源として今後も当委員会の会合の意義はますます大きなものとなっていくと考えられる。

(この項、安田雄生)

Ⅳ 保健室との連携

保健室へ来室する生徒の状態に応じて、個別にSCへの相談を勧めたり、SCが保健室へ来室し、そこで来室している生徒と話をしたりするといったケースもあった。

出席状況や保健室で把握している生活の様子を伝え、今後の学校での関わり方について確認をした。SCと担任が直接連絡できない場合には、養護教諭がつなぎの役割をした。

後述するように、前年度まで、ピアサポートプログラムを保健委員会の活動として実施してきたが、全校の希望生徒に変更できたことにより、保健室へ来室する生徒で対人関係を苦手とする生徒にピアサポートプログラムを勧めることができた。

(この項、安藤久美子)

Ⅴ ピアサポートプログラム

ピアサポートプログラムは19年度までは保健委員のメンバーを中心に構成していたが、20年度は保健委員に限定せず全校から希望者を募り昼休みを利用して実施することとした。活動の実施内容はスクールカウンセラーだよりにより全校生徒に告知し、養護教諭やSCが個別に参加を呼びかけることもあった。毎回の参加者は平均3.2名で金成SCがファシリテーターとなりスマイル・ルームで活動した。プログラムの内容は表4に掲載する。

参加動機については「親しくない人との接し方について学びたい」「コミュニケーションを上手に取れるようになりたい」という意見が聞かれた。参加者は毎回の感想を“ふりかえり用紙”に記入しファシリテーターに提出した。この中には他者との共通点や相違点を知る楽しさや自分の言いたいことが上手に伝わった時の嬉しさ、「他者理解のためには努力が必要」と自らの気づきを記述することがあった。今年度は第1回と第5回で参加者がエゴグラムを受け、何名かには個別に自我状態の変化について考える時間を設けた。活動を通して友人が増え、自分の気持ちを以前より上手に伝えられるようになった、家族にも指摘を受けたと

表4 ピアサポートプログラムの開催日時と内容

| 回 | 月日 | ウォーミングアップ | エクササイズの目標 | 内容 |
|-----|-------|-------------|--------------------------|-----------------------|
| 第1回 | 12/11 | エゴグラム実施 | 知り合うために | 「自己紹介, 他己紹介」 |
| 第2回 | 12/18 | 「ハッピーバースデー」 | 協力するために | 「人間コピー」 |
| 第3回 | 1/13 | 「この人は誰でしょう」 | 聞き方・伝え方① 気持ちを聞き取る | 「スイッチ」 |
| 第4回 | 1/22 | なし | 聞き方・伝え方② 聞くときの姿勢や態度 | 「頼むとき, 断るときのロールプレイング」 |
| 第5回 | 2/5 | なし | 自分とのコミュニケーション エゴグラム実施 | 「見守ってくれるもの」 |

感想を寄せた参加者もいた。

(この項, 島 義一)

本年度は少人数での活動となったため緊張せず気軽な気持ちで参加できる形式であったと思われる。しかし参加人数が少なかったことから, 今後は同じ内容の会を年に複数回実施するなど, 活動の広がりについて検討したい。

(この項, 金成美恵)

VI 四校園教育相談推進委員会

1. 目的

本委員会は, 附属幼・小・中, 特別支援学校が, 教育相談機能の充実に向けて連携した実践を推進する中核的な任務を担う組織として平成16年度に発足した。保護者や教師, 子ども達のカウンセリングをコーディネートするとともに, 各校園と家庭がより緊密な連携を図りながら, 子ども達を遅く, 健やかに育てるための教育相談を積極的に推進することを目的としている。基幹校を附属中学校として, 委員長(附属中学校長), 副委員長(附属中学校副校長), 庶務(附属中学校主幹教諭), 委員(各校教諭, 各校養護教諭, SC)から構成されている。

2. 会合とその内容, 成果と課題

平成20年度は, 年2回開催の会合を開催した。第1回目の会合は, 各校園の教育相談の活動状況と情報交換を行った。第2回目の会合では, 中学生1名, 小学生(高学年, 低学年)2名についての事例研究を行った。各校園での関わりのあった児童生徒なので, それぞれの学校園での状況や指導の様子などから今後の関わり方について話し合うことができ大きな成果が得られた。また, 幼, 小, 中学校でのSCの相談体制が確立し, 長期的な視野に立った教育相談を行うことができるようになった。また, 「スクールカウンセラーだより」を各校園にデータベースで配布し, 各校園で必要な部分を活用できるようになってきた。今年度よりSCの予算措置がなされたので, SCを効果的に活用しながら各校園がさらに連携した教育相談を推進していきたい。

VII 成果と今後の課題

1. 潜在的不適応生徒への予防的ケア

スクールカウンセリング活動および教育相談推進委員会での検討で明らかになってきたことであるが, 2年生なかば, あるいは3年生のはじめあたりから, 欠席が目立つ生徒が毎年数名出現する。それらの生徒のなかには1年生段階で, 箱庭やエゴグラム, あるいは雑談を希望してスマイル・ルームを訪れている生徒が少なくない。そのときの訪問ではさほど深刻な話題は語られていないのだが, 後の不適応傾向の発現を考えると, この時点でSC, 養護教諭, 学級担任などがもう少し先を視野に入れつつケアを考えておくことが必要に思われる。

これらの不適応傾向の生徒の特長については現在分析中であるが, 大まかにいって, コミュニケーション力の課題をもつように思われる。2年生なかばから3年生にかけて, 彼らが自身のコミュニケーション上の課題, まわりの生徒とうまくいかなさを感じ始めるとき, 本格的な不適応感をもつ生徒が出現するのではないか。したがって, 1年生段階でのスマイル・ルーム訪問は, その前触লেরなものではないかと考えられ, この時点である程度継続的な相談を組んでいくことや, 学級担任・養護教諭と話し合っ, クラス, 保健室での様子を情報交換しながら, 必要な指導援助をとっていくこと, あるいは, ピアサポートプログラムのなかで楽しみながらコミュニケーションの練習を行えるように働きかけることなどが考えられる。

ただ, 気をつけなければいけないのは, 予防ケアといっても, 不適応を示すにちがいないという先入観をもって生徒にあたることは厳に慎まなければならないということである。

2. 教育相談推進委員会の改善

本年度までの教育相談推進委員会は, 生徒指導委員を兼務した教育相談係から構成されている。そのため, 生徒指導委員会は, メンバーが多くなり, 全員そろっ

ての開催ができにくく、しかも、教育相談推進委員会との協議内容の重複も見られるという課題が生じた。次年度は、教育相談推進委員会を独立させる組織の改編と実効ある教育相談推進委員会の運営をしていく必要がある。

3. ピアサポートプログラムについて

潜在的な不適応生徒の適応技術向上のためにもピアサポートプログラムは寄与しうる。

SCがファシリテーターを務めるピアサポートプログラムを継続する一方で、これまでの成果を受けて、学級、学年の単位で「自分を表現する」「他者を理解する」「協力しあう」などを目標としたピアサポートプログラムを行うことを計画し、実施する予定である。

4. 四校園教育相談推進委員会について

20年度の同委員会会議において、事例検討を行ったことはひとつの成果といえる。適応困難をもつ子どもを幼稚園、小学校、中学校と2つの段階で、また発達支援相談室「けやき」をもつ特別支援学校の視点からの助言を得ながら検討することで、現在のその子どもについてのより適切な指導援助を見出すことが期待できるし、またひとつの事例について話し合うことで学校園の協力と連携を深めることもできよう。

VIII おわりに

平成20年度の「教育相談室」運営について報告した。

17年度から始まり4年を経過した現在、「教育相談室」はスクールカウンセラーの活動と教員の教育相談組織の連携という点で、まずまずの成果を上げていると言ってよいだろう。カウンセラー、教員双方が多忙ななか、月1回の会合をもち、その会合が各学年の教員組織とも有機的につながっている。このような体制は、スクールカウンセラーを含む教育相談組織の在り方のひとつのモデルともいえよう。

今後は、ピアサポートプログラムの学級実施計画などに見られるように、個別対応、事後対応を中心とする教育相談活動と、学級単位で授業、生活の中で行いうる教育相談活動とをつなげることも「教育相談室」活動の目標のひとつとし、活動を充実させていきたいと考えている。

註

- 1) 青木真理, 佐藤文子, 石井博行, 君島勇吉「平成14・15年度 附属中学校カウンセリング・ルーム活動報告」福島大学教育実践紀要第47号 pp63-66 2004
- 2) 青木真理, 渡部由美, 佐藤敏宏, 石井博行, 君島勇吉「平成16・17年度 附属中学校『教育相談室』活動報告」福島大学総合教育研究センター紀要 創刊号 pp115-1182006
- 3) 青木真理, 金成美恵, 渡部由美, 遠藤博晃, 天形 健, 君島勇吉「平成18年度 附属中学校『教育相談室』活動報告」福島大学総合教育研究センター紀要 第3号 pp109-112 2007
- 4) 青木真理, 金成美恵, 渡部由美, 橋本浩幸, 天形 健, 島 義一「平成19年度 附属中学校『教育相談室』活動報告」福島大学総合教育研究センター紀要 第5号 pp97-100 2008